農薬の登録内容は頻繁に変更されます。農薬は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針（http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html）から。
農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ（http://www.jppn.ne.jp/osaka/）

営農インフォ

営農総合センター　指導販売課 072（444）8001

水稲

◆育苗の管理

出芽がそろった後、緑化するまでは急激な温度変化を避け、強い直射日光が当たらないようにする。かん水は1日1～2回程度とし、極端な乾湿の繰り返しは苗立枯病を誘発しやすいので注意する。苗立枯病が発生した時は、タチガレエースM液剤[*1]（500～1000倍／は種時または発芽後／1回、育苗箱1箱当たり500㎖、使用土壌約5ℓ）等をかん注する。

田植え適期は、稚苗では育苗日数が20日程度（3.5葉）、中苗では25～30日程度で、株元の不完全葉が青々としていて、茎が太く徒長していない若々しい苗が良い苗。

◆箱粒剤の施用

イネミズゾウムシやウンカ類、ニカメイチュウ、コブノメイガ、ツマグロヨコバイといもち病の同時防除にはブイゲットフェルテラゼクサロンL粒剤を移植当日に育苗箱1箱当たり50g（使用土壌約5ℓ）を均一に散布し、葉についた薬剤を払い落とす。1箱当たりの施用量を厳守する。

◆元肥の施用

田植前の耕起時に水稲配合（9・5・8）を10a当たり60kg全層施肥（耕起→施肥→耕うん→入水→代かき→田植）する。また、水稲配合の代わりにユーコート202を10a当たり40kg施用すると、穂肥の必要がなく省力的。ただし、前作が野菜の場合は、半分程度に減らす。また側条施肥の場合は施肥量を2割程度削減する。元肥のやり過ぎは倒伏の原因となるので注意。

◆代かき

代かきは水持ちをよくするだけでなく、ほ場を均平化し除草剤の効果を安定させ、良食味米を生産するために重要な作業。ただし、代かきをし過ぎると土の粒子が細かくなり過ぎて、活着が遅れ、初期生育が悪くなることがあるので注意。

◆本田初期の雑草防除

本田初期除草剤の使用時期が、移植栽培では移植7日前までの使用となっている。薬剤によって使用時期、使用量が異なるので注意する。処理が遅れ、雑草が大きくなると効果が落ちるので、最適処理時期を逃がさないこと。ダッシュワンフロアブル[*2]（10a当たり500㎖／植代後～移植前7日または移植直後～ノビエ1葉期、ただし移植後30日まで／1回）、クサトリーDXジャンボL[*2]（10a当たり小包装（パック）10個（400g）／移植後3日～ノビエ2.5葉期、ただし移植後30日まで／1回）等を散布する。

除草剤使用の注意点

- 代かきは均平にならす。
- 最近、移植後30日まで使用できる除草剤が増えているが、ノビエの葉期を見ながら、適期に処理する。
- ダッシュワンフロアブル等のフロアブル剤の原液混水散布では、使用前に容器をよく振っておき、水深3～5㎝の湛水状態で、うねから容器を振って散布する。大きいほ場では田の中央付近からも散布する。
- クサトリーDXジャンボL等のジャンボ剤（パック剤）は水深5～7㎝以上の湛水状態で、乾いた手で投げ入れる。また、浮き草、藻が多発している水田では効果が劣ることがある。
- 湛水処理し、散布後1週間は水深3～5㎝の湛水状態を保ち、落水、かけ流し等の水の出入りを避ける。また、処理後の雨による水のあふれもないように注意する。

◆ジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）の防除（田植後の防除）

田植後20日間は、水深4㎝以下の浅水にすると貝が活動困難となる。そのため田面を均平にし、食害を避けるためには浅水管理を心掛ける。卵は水中では呼吸できず死亡するので赤色の卵塊を水中にかき落とすのが効果的。また、侵入防止のために、取水口と排水口に目合5㎜以下の網を張る。

スクミノンは、水深3～5㎝の湛水状態にして、落水やかけ流しをしないで水田全面に[*2]（10a当たり1～4kg／移植後、ただし収穫60日前まで／2回以内）均一散布する。また、水口周辺の被害が多い傾向にあるので、水口周辺はやや多い目に散布することが望ましい。スクミノンは、スクミリンゴガイに対する誘引性を持っているため、処理直後から誘引性を示し摂食して即効的な作用を示す。

野菜

水なす

◆栽培管理

トンネル早熟栽培では、ホルモン剤処理を行うと梅雨時の落花防止と着果・果実肥大・熟期を促進する。ホルモン剤には、トマトトーン（50倍）を用い、開花当日1花房につき1回噴霧する。

露地栽培では排水に努め、降雨後には滞水させないようにする。特に、降雨が続くと疫病（褐色腐敗病）が発生するので、下葉をかき取り通風を良くする。

また、土の跳ね上がり防止、雑草の発生抑制、土壌表面の急激な温度変化を避けるため、わらや黒色ポリやシルバーポリ等でマルチを行う。

◆病害虫防除

- アブラムシ類

トンネル早熟や露地栽培では、ウイルス病予防のため、アブラムシ類の防除を徹底する（表1参照）。

- アザミウマ類（スリップス類）

発生初期の防除に努める（表1参照）。また、忌避効果を狙ってシルバーマルチを行い、外部からの侵入防止のために寒冷しゃで、ほ場の周囲を覆う。

- すすかび病、うどんこ病

すすかび病は多湿で発生が増えるため、ハウス栽培では換気を良くし、露地栽培では過繁茂を避け、下葉をこまめに取るなど、通風を良くし湿度が上がらないよう注意する。また、被害葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

うどんこ病は日照が弱い時や、過繁茂となった場合に発生が多いため、芽かき、葉かきをこまめに行い、葉が茂りすぎないようにする。ハウス内では適度のかん水を行い、過乾燥を避ける。

また、なり疲れ等の肥料切れ時に発生が多くなるので、適正な肥培管理に努める。

農薬による防除では、発生初期の防除に努める。薬剤耐性菌が出ないように系統の異なる薬剤をローテーション散布する（表2、3を参照）。

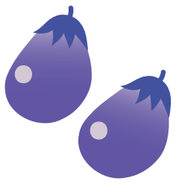
ほとんどの薬剤は葉裏の病斑にかからないと効果がない。こまめに葉かきを行い、薬液がかかりやすいようにするとともに、葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

◆褐色腐敗病

梅雨時期や夏から秋にかけての降雨が多い時期に多発する。降雨による土壌の跳ね上がりで伝染するため、敷きわら等によるマルチを行う。

排水を良くし、過湿にならないようにする。

発生を認めたら、表4の薬剤で防除する。



しゅんぎく

◆栽培管理

高温期になるのでハウスの屋根に遮光ネット、寒冷しゃ等を展張する。また、ハウスのサイドを開放して換気に努める。

日中高温になるため、昼間のかん水を避け、朝夕の涼しい時を見計らって行う。また、しゅんぎくに水分が多く含まれていると下葉のずるけなど荷傷みの原因になるので収穫前にはかん水を控えめにする。高温および施肥量過多の条件下で、石灰欠乏による心枯症状が発生しやすくなるので適正な施肥量を心掛ける。

◆病害虫防除

- マメハモグリバエ

マメハモグリバエの被害が多くなるため、発生初期に薬剤散布する（表5）。収穫後は作物残さを残さないようにほ場を衛生的に保つ。また、施設の場合、収穫後にうね全面をビニールで被覆し、地表下の温度を上げて地中にいるマメハモグリバエの蛹を殺すことも有効である。

こまつな

◆病害虫防除

高温多湿条件では、白さび病が発生しやすくなるので、薬液が葉裏にかかるように予防散布する（表6参照）。

連作ほ場で萎黄病の発生の恐れがある場合は萎黄病耐病性品種を選定するとともに、過乾燥および過湿などによる根傷みや、過剰施肥による濃度障害に注意する。発生が多い場合は、栽培を打ち切り、他科作物（しゅんぎく、ほうれんそう、ねぎ等）と輪作を行うか、太陽熱利用による土壌消毒もしくは、バスアミド微粒剤で土壌消毒する。

*1農薬名の後の括弧内は、（希釈倍数／使用時期／総使用回数）を表示しています。
*2農薬名の後の括弧内は、（10a当たりの散布量／使用時期／総使用回数）を表示しています。

営農総合センター　指導販売課 072（444）8001

果樹

みかん

◆病害虫防除

6月上旬にはヤノネカイガラムシの第一世代幼虫を対象にモスピラン顆粒水溶剤（2000～4000倍／収穫14日前まで／3回以内）を散布する。6月中旬には、梅雨の合間をぬってミカンハダニの防除にハーベストオイル（150～200倍／夏期6～7月中旬）を、黒点病の予防にペンコゼブ水和剤（400～800倍／収穫30日前まで／4回以内）を散布する。

また、ミカンナガタマムシは、成虫（写真参照　体長約1㎝）が発生していれば、ミクロデナポン水和剤85（1700倍／収穫21日前まで／4回以内）を散布する。ノコギリ状に食害された葉や半月形の成虫の脱出孔があれば要注意。

ミカンナガタマムシ（成虫）

＊モスピラン顆粒水溶剤は、かんきつのカイガラムシ類で登録がある。

＊ハーベストオイルは、かんきつで登録がある。高温時は、使用を避ける。

もも

◆新梢の管理

この時期は新梢の伸長が盛んになり、樹勢が強い樹では徒長枝の発生が目立つようになる。徒長枝をそのままにしておくと、樹冠内の日当たりが悪くなるため、着色不良や糖度不足など果実品質の低下を招く。また、6月上旬以降、果実の肥大が急速に進むので、徒長枝に養分を奪われないよう、徒長枝を間引くとともに、ねん枝や横向きに誘引して枝を徒長させないようにする。

◆病害虫防除

6月上旬に黒星病・灰星病の予防にオーシャインフロアブル（2000～3000倍／収穫前日まで／3回以内）を、シンクイムシ類、モモハモグリガ、アブラムシ類の防除にモスピラン顆粒水溶剤（2000～4000倍／収穫前日まで／3回以内）を散布する。

いちじく

◆土壌マルチ被覆

遅くとも6月上旬までに、白色マルチ（抑草効果の高い裏側が黒色の白黒マルチも可）やシルバーマルチなどの反射マルチで土壌を被覆する。

マルチ被覆の効果

①アザミウマ類（スリップス類）は白色や銀色を嫌う性質があるため、園内への飛来が減る。

②園内の抑草により、害虫の生息地が減る。また、風通しが良くなるため、病害の発生が減少する。

③土中にいるアザミウマ類の蛹の羽化を妨げる。

④雨水の跳ね上がり防止により、疫病など土中の病原菌が果実へ付着するのを防ぐ。

⑤樹冠内部の日照不足を改善し、果実着色や糖度など品質を高める。

◆新梢の誘引

樹勢の弱い樹や主枝の先端部は、6月上旬の早い時期に垂直気味に誘引し、樹勢を強めるようにする。一方、樹勢の強い樹や主枝の基部付近は、新梢の付け根を垂直ではなく、横方向に緩やかに誘引し、樹勢を落ち着かせるようにする。

◆病害虫防除

1～2段目の果実の目が開く6月上旬にアザミウマ類とキボシカミキリとイチジクヒトリモドキの防除にモスピラン顆粒水溶剤（2000倍／収穫前日まで／3回以内）を散布する。6月下旬にアザミウマ類の防除にアディオン乳剤（2000倍／収穫前日まで／2回以内）、疫病の防除にはランマンフロアブル（2000倍／収穫前日まで／3回以内）を散布する。

＊農薬名の後の括弧内は、（希釈倍数／使用時期／総使用回数）を表示しています。

表1 なすの害虫防除に登録がある農薬

害虫名	薬剤名	IRACコード	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
アブラムシ類	トレボン乳剤	3A	1000～2000倍	収穫前日まで／3回以内	100～300ℓ／10a
	アーデント水和剤	3A	1000倍	収穫前日まで／4回以内	150～300ℓ／10a
	アドマイヤー水和剤	4A	2000倍	収穫前日まで／2回以内	100～300ℓ／10a
	モスピラン顆粒水溶剤	4A	4000倍	収穫前日まで／3回以内	100～300ℓ／10a
ミナミキイロアザミウマ類	アドマイヤー水和剤	4A	2000倍	収穫前日まで／2回以内	100～300ℓ／10a
	コテツフロアブル	13	2000倍	収穫前日まで／4回以内	100～300ℓ／10a
	アファーム乳剤	6	2000倍	収穫前日まで／2回以内	100～300ℓ／10a
	スピノエース顆粒水和剤	5	2500～5000倍	収穫前日まで／2回以内	100～300ℓ／10a
ミカンキイロアザミウマ類	アーデント水和剤	3A	1000倍	収穫前日まで／4回以内	150～300ℓ／10a
	アファーム乳剤	6	2000倍	収穫前日まで／2回以内	100～300ℓ／10a
	スピノエース顆粒水和剤	5	2500～5000倍	収穫前日まで／2回以内	100～300ℓ／10a

※IRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表2 なすのすすかび病に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
トリフミン乳剤	3	2000倍	収穫前日まで／5回以内	100～300ℓ／10a
ラリー水和剤	3	4000～6000倍	収穫前日まで／4回以内	150～300ℓ／10a
アフェットフロアブル	7	2000倍	収穫前日まで／3回以内	100～300ℓ／10a

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表3-1 なすのうどんこ病に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
トリフミン乳剤	3	2000倍	収穫前日まで／5回以内	100～300ℓ／10a
ラリー水和剤	3	4000～6000倍	収穫前日まで／4回以内	150～300ℓ／10a
パンチョTF顆粒水和剤	3.U06	2000倍	収穫前日まで／2回以内	100～300ℓ／10a
アフェットフロアブル	7	2000倍	収穫前日まで／3回以内	100～300ℓ／10a
ベルクート水和剤	M07	3000倍	収穫前日まで／3回以内	100～300ℓ／10a

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表3-2 野菜類のうどんこ病に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
ボトキラー水和剤	BM2	1000倍	発病前～発病初期／－	150～300ℓ／10a
カリグリーン	NC	800～1000倍	収穫前日まで／－	100～300ℓ／10a

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。
※ボトキラー水和剤は、野菜類で登録がある。
※カリグリーンは、野菜類（トマト、ミニトマトを除く）で登録がある。
※すすかび病の病班は薬剤をはじきやすいので、展着剤ニーズなどの加用で防除効果を高めることができる。

表4 なすの褐色腐敗病に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
ホライズンドライフロアブル	27、11	2500倍	収穫前日まで／3回以内	150～300ℓ／10a
ランマンフロアブル	21	2000倍	収穫前日まで／4回以内	150～300ℓ／10a
ピシロックフロアブル	U17	1000倍	収穫前日まで／3回以内	100～300ℓ／10a

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表5 しゅんぎくの病害虫防除に登録がある農薬

病害虫名	薬剤名	RACコード	希釈倍数 使用量	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
マメハモグリバエ	ベストガード粒剤	I：4A	9kg／10a（生育期株元処理）	収穫3日前まで／1回	－
	カスケード乳剤	I：15	2000～4000倍	収穫7日前まで／2回以内	100～300ℓ／10a
	トリガード液剤	I：17	1000倍	収穫7日前まで／2回以内	100～300ℓ／10a
	アファーム乳剤	I：6	2000倍	収穫7日前まで／2回以内	100～300ℓ／10a
べと病	Zボルドー	F：M01	500倍	－／－	100～300ℓ／10a

※RACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。
※トリガード液剤、アファーム乳剤はハモグリバエ類で登録がある。
※Zボルドーは、野菜類で登録がある。散布後は、白く汚れる。

表6 こまつなの病害防除に登録がある農薬

病害名	薬剤名	RACコード	希釈倍数・使用量	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
白さび病	アミスター20フロアブル	F：11	2000倍	収穫7日前まで／2回以内	100～300ℓ／10a
	ランマンフロアブル	F：21	2000倍	収穫3日前まで／3回以内	100～300ℓ／10a
萎黄病 根こぶ病 一年生雑草	バスアミド微粒剤	I：8F F：M03 H：Z	20～30kg／10a（均一に散布して土壌混和）	は種10日前まで／1回	－

※RACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。
※ランマンフロアブルは、非結球あぶらな科葉菜類（なばな類を除く）で登録がある。